

明治時代の写真館

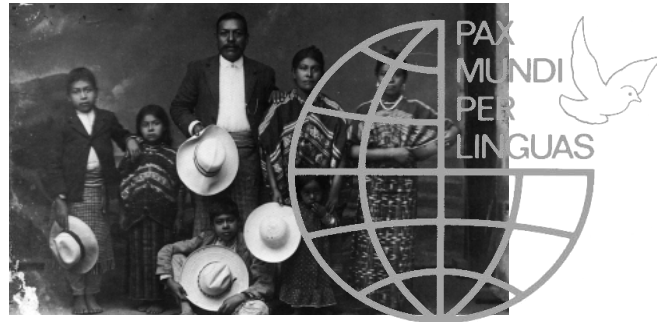
— グアテマラの屋須弘平 —

大垣 貴志郎

明治十三年の写真館の話である。1880年にグアテマラ共和国の首都、グアテマラ市で「日本写真館」の看板を掲げた屋須弘平という人物がいる。この人がなぜグアテマラに行き、どうして写真館を開設したか、気になる。明治日本には果敢な挑戦を試みた日本人がいたということだが、彼もその一人かもしれない。

明治七年（1874年）に天文学的に興味深い現象が観察された。その観測地点として東洋が適していたが、日本にも三カ国から観測隊がやってきている。観測隊の目的は当時、地球と金星間の距離を、さらに、地球から太陽までの距離、つまり天文単位を求めることが極めて重要なことであり、ひいては太陽系の規模の解明にまでつながったので世界の天文学者にとって絶大な関心事であった。この年、世界の科学分野の先進国は特に観測条件の良いとされる東洋に観測隊を派遣した。日本独自の観測は東京麻布飯倉町海軍観象台と品川御殿山、また、函館で実施された。宮中御苑内操練場では明治天皇の「金星御覧」があったと言われている。日本もこの年は金星観測に関心を寄せていたのである。北京にフランス隊とアメリカ隊が基地を設営、ロシア隊もシベリアから「万里の長城」付近まで五カ所設営している。記録によれば、世界中に総計七十五の観測所が設営され、この結果、膨大な観測報告が集積したことは推察できる。日本にはアメリカ、フランス、メキシコの三カ国が金星観測隊を派遣した。アメリカは長崎に観測地を、フランスは長崎と神戸、メキシコは横浜に二カ所設営した。幸い、1874年12月9日は横浜のメキシコ隊野毛山基地と山手本村観測基地は、日本国内で最も天体観測に適した気象条件に

恵まれた位置であったという。メキシコからは、初代国立チャプルテペック天文台長のフランシスコ・ディアス・コバルピアス隊長と四人の隊員が派遣されていた。観測終了後、隊長は帰国してから金星観測記録報告と三カ月に及んだ日本滞在経験を綴った「日本旅行記」を、帰国の翌年1876年にメキシコで出版している（その翻訳書は『ディアス・コバルピアス 日本旅行記』大垣貴志郎 坂東省次共訳 雄松堂出版 異国叢書第二輯 第七巻 昭和58年）。



この人はなぜグアテマラに行ったのか。観測隊が横浜に滞在中、明治政府から一人の通詞が派遣されていた。「通詞は数学には門外漢で、専門用語で説明してもほとんど通訳は出来ず、文部技官の質問内容も十分のみみ込めなかった。（中略）ある日、私の滞在中ずっと側で通訳をしていた若者[屋須弘平]が、フランス語の勉強を志し、帰国の日が近づいた時、勉強を続けるためメキシコまで同行させてほしいと申し出てきた」（前掲書より引用）。隊長は帰国後、グアテマラ駐劄公使に任命される。その時、屋須弘平はメキシコ公使に同行してグアテマラに渡ったのが明治十年で、その三年後に写真館を開いた。なお、フランシスコ・ディアス・コバルピアスの原著『メキシコ金星観測隊日本派遣報告 1876年』は、後に、明治政府が外国と初めて締結した平等条約である日墨友好通商航海条約（1888年にワシントンで調印され日本で公布されたのが1889年6月6日）の条約締結交渉で、メキシコ側が日本国の国情評価に参考